

# Coriolanus におけるイメージリー の機能について

—— 特に “disease”, “animal”, “god” の  
イメージリーに言及して ——

内 山 倫 史

戯曲 *Coriolanus* の主題について、G. B. Harrison は、次のように述べている。

The theme of the play is a full length study of the character of an individual who suffered from intolerable pride.<sup>1</sup>

*Coriolanus* の悲劇は、彼が余りにも尊大で、民衆との人間関係が断絶して、“solitariness” の存在になるところにある。この主人公の性格描写に、一連のイメージ、即ち “disease”, “animal”, “god” のイメージが、重要な役割を果している。

この小論の目的は、上述のイメージの考察にある。

尙、イメージという概念の意味内容は、それを使用する人によつて、色々違うようであるが、私は、すべての比喩的、形容的、描写的表現を、全部イメージの中に含めて、考える事にする。

## I

Spurgeon は、Shakespeare の戯曲の中で、*Hamlet* 以後、*Coriolanus* の中に “disease” のイメージが一番多くあらわれる事を指摘している。

このイメージは、*Coriolanus* が、市民達の卑劣さを、又、彼等に対する激しい嫌悪感を強めるのに、屢々用いられている。先ずこのイメージは、1幕1場、穀類不足の為、暴動を起した市民達を鎮める、*Coriolanus* の台詞にあらわれる。

What's the matter, you dissentious rogues,  
That, rubbing the poor itch of your opinion,  
Make yourselves scabs ?

(1. 1. 167—169)

“scabs” という “disease” のイメージは、文字通りの病気の意味、つまり「疥癬」という意味の他に、Onions, Schmidt, Dover Wilson 等が注をしているように、「卑劣な人間」という意味がある。“scabs” という “disease” のイメージで、彼は病気の如き存在である市民達

を嫌悪すると同時に、彼等の卑劣さを軽蔑している。又、1幕4場、ヴォルサイの軍隊の為  
塹壕へ敗退するローマ兵を罵る彼の言葉にも、同様に、“disease”のイメージがあらわれ  
る。

All the *contagion* of the South light on you,  
You shames of Rome! you herd of—*Boils and plagues*  
Plaster you o'er, that you may be abhorred  
Farther than seen, and one *infect* another  
Against the wind a mile! you souls of geese  
That bear the shapes of man, how have you run  
From slaves that apes would beat! Pluto and hell!  
All hurt behind! backs red, and faces pale  
With flight and *agued* fear!

(1. 4. 30—38)

戦争における名誉<sup>4</sup>を特に尊重する彼は、廉恥心もなく、「虐にかかつたように、ふるえて逃  
げる兵士」の卑劣さを、激しく攻撃するとともに、「癩のようなむさい腫物」というイメ  
ジで、伝染病のように、彼等を忌み嫌う感情<sup>5</sup>が、強く打ち出されている。

R. A. Foakes も指摘しているように、Shakespeare の戯曲では、或る幕に、或るイメ  
ジが集中して用いられ、すぐれた機能を果している。この戯曲において、「病氣」のイメ  
ジは、三幕一場に頻出して、大きな役割を果している。この場面は、Coriolanus の民衆に  
対する尊大さが、“disease”のイメージにより巧みにあらわされると同時に、民衆が逆に、  
Coriolanusこそ国家を乱す存在として、彼を追放する狼煙を挙げる、劇の重大な局面であ  
る。3幕1場、民衆が、Coriolanus の執政官就任を取消した事を伝える護民官 Brutus と  
Sicinius に対して、激昂した Coriolanus は、次のように叫ぶ。

As for my country I have shed my blood,  
Not fearing outward face, so shall my lungs  
Coin words till their decay against those *measles*,  
Which we disdain should tetter us, yet sought  
The very way to catch them.

(3. 1. 76—80)

ここには、“measles”という“disease”のイメージが用いられているが、このイメージも、  
前述の“scabs”と同様に、二つの意味がある。一つは文字通り病気の「癩病患者」、今一つ  
は、「卑劣な人間」という意味である。Coriolanus を執政官に選出した直後、忽ちそれを取  
消す民衆の移り気、卑劣さが、この“disease”のイメージによつて、巧みにあらわされてい  
る。と同時に、このような民衆に選挙権を与えるのは、国家にとつて危険であり、民衆こそ  
国家という身体を危くする伝染病的存在である、という考えが強められている。

さて、このような国家を治療する彼の方法は、激烈である。同幕同場、護民官 Brutus と

Sicinius の言葉に、益々激昂した Coriolanus は次のように叫ぶ。

To jump a body with a dangerous physic  
That's sure of death without it—at once pluck out  
The multitudinous tongue : let them not lick  
The sweet which is their poison.

(3. 1. 154—157)

「劇薬を服して治療する」——これが彼の治療法である。彼は、病気の原因を精密に調べあげた後、正しく治療する方法、つまり、これを国家問題に当て嵌めると、ローマ市民達の不平の原因をつきとめ、それを軽減する手段を、決して講じない。「貴族連が慈悲心をすてて剣を用いる事を評してくれりや、あいつらの千人や二千人は一挙に叩き殺して、死人の山を築きあげてみせる」(1. 1. 201—204)——これが彼の手段である。Coriolanus にとって、民衆に、自由、権力といった甘い物 (sweet) を与える事は、却つて毒になる。彼は、決して民衆と同列に身を置こうとはしない。このような彼の態度は、民衆の観点からすれば、逆に「彼こそローマという国家を乱す病気であり、従つて“isolate”しなければならない存在」という事になる。

ここで“disease”のイメージの今一つの機能、つまり、民衆により、Coriolanus が“isolate”される事を強める機能を見てみる事にする。3幕1場、護民官 Brutus, Sicinius 及び群民が、Coriolanus 捕縛に向うのを止めようとして、Menenius は Sicinius と、次のような言葉の遣取をする。

Sicinius. He's a disease that must be cut away.  
Menenius. O, he's a limb that has but a disease.  
Mortal, to cut it off; to cure it, easy.

(3. 1. 295—297)

Menenius にとっては、「唯、そのほんの一部の、つまり、手足の病気にすぎない」Coriolanus も、Sicinius 一味にとっては、彼こそ国を乱す存在であり、国家を身体に喩えれば、「切り取らなければならない病気」なのである。更に同幕同場、Sicinius の言葉を受けて述べる Brutus の台詞は、注目に値する。

Will hear no more.  
Pursue him to his house and pluck him thence  
Lest his *infection*, being of catching nature,  
Spread further.

(3. 1. 306—308)

“infection” (伝染)——この言葉は、1幕4場で、ヴォルサイの軍隊の為、敗退するローマ兵を罵る Coriolanus の台詞の中に用いられたものであるが、今度は逆に Brutus により Coriolanus 自身にむけられている。このイメージにより、Coriolanus こそ国家を乱す伝染病

である、という考えが、強く打ち出されている。

更に、この治療には、護民官 Brutus と Sicinius が当る事になる。3幕1場、警保官、群民対 Coriolanus の争を鎮めようとする Menenius に向い、Brutus は次のように述べる。

Sir, those cold ways,  
That seem like prudent helps, are very poisonous  
Where *the disease is violent*.

(3. 1. 220—222)

Brutus 一味の見地からすれば、Coriolanus は、ローマという健康体にとって、「激烈な病気」であり、「冷淡な治療法」は、却つて毒になる危険な存在である。遂に彼は民衆により、ローマから追放される事になる。

以上のように、この戯曲において、Coriolanus の目から見た民衆の卑劣さ、逆に民衆の目から見た病気のような存在の Coriolanus——これらが“disease”のイメージにより、見事に浮彫りにされている。

Coriolanus 中の“disease”のイメージは、1幕1場と3幕1場にのみ集中的に頻出して他の幕には、散発的にあらわれるだけである。然し、両幕両場が、劇中の極めて重要な場面である事、又たとえ散発的でも、その累積的效果が著しい事を考え合せると、このイメージの果す役割は甚だ大きい。

## II

*Coriolanus* における“animal”のイメージも、“disease”のイメージと同じ機能を果している。

高貴な動物、例えば、“lion”, “eagle”, “dragon”, “tiger”, 等と、卑しい、臆病な動物、例えば、“dogs”, “cats”, “hares”, “geese”, “asses”, “mules”, “camels”, “wolves”, “crows”, “goats”等が、対照的に用いられ、高貴な動物が、主として貴族に対して用いられているのにひきかえ、野卑な動物は、市民達の卑劣な性質をあらわすのに屢々用いられている。

尊大な Coriolanus が、市民達を軽蔑して用いる“animal”のイメージは、“dogs”, “hounds”, “curs”等で、全幕到る処に用いられている。1幕1場で、暴動を起した市民達に、彼はいきなり“*curs* / That like nor peace nor war”(1. 1. 172—173)とどなりつける。3幕3場では、追放される身となつた Coriolanus は、激昂して次のように叫ぶ。

You common cry of *curs*! whose breath I hate  
As reek o' th' rotten fens, whose loves I prize  
As the dead carcasses of unburied men  
That do corrupt my air—I banish you!

(3. 3. 120—124)

ここでは、彼は市民達を“*curs*”のイメージで罵りつけているが、“reek o' th' rotten fens”と

か, “the carcasses of unburied men / That do corrupt my air” という病気を暗示するイメージと結びついて、彼の市民達に対する嫌悪感が強められている。最後の “I banish you!” という言葉の中には、coriolanus の尊大さが見事にあらわれている。

扱て、市民達の卑劣さは、上述のように “dogs” のイメージで屢々あらわされるが, “monster” のイメージによつてもあらわされている。このイメージが最初にあらわれるのは、2幕3場、公演場における市民3の言葉の中であるがここで用いられる “monstrous”, “monster” というイメージは、Coriolanus によつて, “Hydra” のイメージで、強く打ち出される。

#### Why

You grave but reckless senators, have you thus  
Given *Hydra* here to choose an officer  
That with his peremptory ‘shall’, being but  
The horn and noise o’ th’ *monster’s* wants not spirit  
To say he’ll turn you current in a ditch  
And make your channel his?

(3. 1. 91—97)

Hydra—Hercules によつて殺された怪物で、一つの頭を切ると、その跡に、新たに二つの頭が出来た怪物——のイメージで、市民達の忘恩に対する憤りと、彼等の卑劣さを見事に浮彫りにしている。4幕1場、ローマ市門の前で、追放されて国を去る時の Coriolanus の言葉、「頭のいくつもある野獣めが、俺を突つき出しやがる」(4. 1. 1—2) は、やはり “Hydra” に言及して、市民達の移り気、卑劣さを強めている。

さて、ここで、この戯曲における “animal” のイメージの興味ある用い方、つまり高貴な動物が、卑しい動物と並列して用いられ、対照的な効果を産み出している点に注意してみよう。3幕1場、護民官 Brutus の言葉に激した Coriolanus の台詞に、先ず、これがあらわれる。

#### the rabble

Call our cares fears; which will in time  
Break ope the locks o’ th’ Senate and bring in  
The *crows* to peck the *eagles*

(3. 1. 137—139)

ここでは、愚民達が「鳥」に、元老院の貴族達が鷲に喩えられている。この「鷲」のイメージは、又、Coriolanus の勇敢な性質を表わすのに用いられている。5幕6場、ヴォルサイの將軍、Aufidius に、「叛逆者」、「泣虫小僧」と罵しられた Coriolanus は、激昂して次のように叫ぶ。

#### False *hound*!

If you have writ your annals true, ’tis there,

That, like an *eagle* in a dove-cote, I  
Fluttered your volscians in Coriole'.  
Alone I did it.

(5. 6. 113—117)

Aufidius が「獵犬」であり、ヴォルサイ人は、戦争では臆病な「鳩」である。Coriolanus は自分自身を、「鳩のように臆病なヴォルサイ人を、唯一人で打ちひしぐ鷲」に喩えている。彼の勇敢な性質は、「鷲」、「竜」(4. 1. 30), 「虎」(5. 4. 32) という高貴な「動物」のイメージで屢々あらわされている。然し、戦場における彼の行動から察せられるように、彼の勇氣は極端であり、<sup>10</sup> 言わば蛮勇とも言うべきである。

Coriolanus の過度の勇氣は、蝶を追う彼の息子の行為に象徴されている。1幕3場、Coriolanus の妻の友達 Valeria は、Coriolanus の息子を評して次のように述べる。

I saw him run after a gilded butterfly; and when he caught it, he let it go again  
and after it again : or whether his fall enraged him, or how 'twas, he did so  
set his teeth, and tear it; O, I warrant, he mammocked it.

(1. 3. 66—71)

“gilded butterfly” には、Ribner も指摘しているように、この世の美しい、優しい人間性の価値が象徴されている。<sup>11</sup> 余りにも過ぎた行為は、この世における美しいものを、「粉な粉なにする」(mammock) 恐れがある。上述の Valeria の言葉に対して、Coriolanus の母、Volumnia は「あれの父が痲癩を起した時に、丁度そういう事をしますよ。」と答えているように、息子の行為は、取りも直さず、父親の行為である。4幕6場、Coriolanus が、ヴォルサイ人に加わつて、ローマへ攻めてくるのを耳にした將軍 Cominius は “god” のイメージで巧みに彼の過ぎた行為を示している。

*He is their god; he leads them like a thing  
Made by some other deity than Nature,  
That shapes man better; and they follow him  
Against us brats with no less confidence  
Than boys pursuing summer butterflies,  
Or butchers killing flies.*

(4. 6. 91—95)

ローマ人達は、Coriolanus とヴォルサイ人が「粉な粉なにひきちぎる蝶」である。Coriolanus のこのような行為は、丁度、勝手に人間を罰する神の行為と同じである。Cominius も、上の台詞で指摘しているように、Coriolanus は「彼等の神」(their god) のような存在になっている。人間界にあつて「神」へ飛翔する Coriolanus は、人間対人間の関係が絶ち切れた存在になる。

以上のように、この劇における民衆の移り気や卑劣さ、度を過ぎた勇氣で、人間性の価値

を踏み躪り、人間界から遊離する Coriolanus——これ等が “animal” のイメージにより、見事に浮彫りにされている。

このイメージも “disease” のイメージと同様、1幕1場及び3幕1場にのみ集中的に頻出して、他の幕には散発的にあらわれるだけであるが、“disease” のイメージの処であげたのと同じ理由で、このイメージの果す役割は大きい。

最後に、人間界から遊離した Coriolanus の姿が、“god” のイメージを通してどのように描かれているか、見てみる事にする。

### III

「神」の主題は、先ず、1幕1場、護民官 Brutus と Sicinius の会話の中にあらわれる。

Brutus. Being mov'd, he will not spare to gird the *gods*.

Sicinius. Bemock the modest moon.

(1. 1. 260—261)

激怒すると、自ら神と対等になつて、神々と争つたり、「貞淑な月神をも嘲弄する」Coriolanus の性格がはつきりと示されている。3幕1場、市民達を罵る Coriolanus の中に、護民官 Brutus は、「民衆と同じ弱点をもつた人間」ではなく、無闇に罰を加える「神」のような存在を感じとる。

You speak o' th' people

As if you were a *god* to punish, not

A man of their infirmity.

(3. 1. 80—82)

このイメージは、彼がローマを追放された4幕以後頻出するが、それにより、彼の “solitariness” が一層強められる事になる。4幕6場、Coriolanus が、ヴォルサイ人に加わつて、ローマを焼き払う意図である事を聞いた Cominius は次のように述べ、彼が神の如き存在である事を指摘している。

He is thier *god*. He leads them like a thing

made by *some other deity than Nature*

(4. 6. 90—91)

“god” の主題の極点は5幕3場である。Coriolanus が、帷幄の中で、先刻、ローマ焼討中止を嘆願に来た Menenius を、手酷く追い返した事を思い出し、Aufidius に語る台詞の中に先ずそれがあらわれる。

This last old man,

Whom with a cracked heart I have sent to Rome.  
Loved me above the measure of a father,  
Nay, *godded* me indeed.

(5. 3. 8—11)

Coriolanus にとって、Menenius の自分に対する崇拜は、丁度、神を崇拜するような仕方に見えたのである。然し、この主題の極致は、彼が、喪服を着て嘆願に来る母、妻、子供を見た時に述べる、わきぜりふ (aside) にある。

out, affection!  
All bond and privilege of nature, break!  
Let it be virtuous to be obstinate.  
What is that curtsy worth? or those dove's eyes,  
Which can make *gods* forsworn? I melt, and not  
Of stronger earth than others. My mother bows,  
As if Olympus to a molehill should  
In supplication nod: and my young boy  
Hath an aspect of intercession which  
Great Nature cries 'Deny not! Let the Volsces  
Plough Rome, and harrow Italy! I'll never  
Be such a gosling to obey instinct, but stand  
As if a man were author of himself  
And knew no other kin.

(5. 3. 24—37)

「あの鳩のような目附は、神々にも誓言を破らせるというが」と呟く彼は、自分を神と同列に置いている。又「人間は、われとわが手で作られたもので、親も、子も、妻も、何にもないもののようにしてくれる」という言葉の中に、人間界と関係を絶たれた Coriolanus の “solitariness” を、明かに認める事が出来る。同じ場面の、Coriolanus への Volumnia の嘆願の言葉の中にも、Coriolanus と神との関連が述べられている。

Speak to me, son;  
Thou hast affected the five strains of honour,  
To imitate *the graces of the gods*  
To tear with thunder the wide cheeks o' th' air,  
And yet to charge thy sulphur with a *bolt*  
That should but rive an oak.

(5. 3. 148—153)

「神々の徳をまねようと努めた」 Coriolanus は、雷光 (a bolt) を持つ Jove に喩えられている。



さて、5幕4場の Menenius と Sicinius との対話で、Coriolanus の神のような存在についての言及が終りになっている。

When he walks, he moves like an engine, and the ground shrinks before his treading. He is able to pierce a corslet with his eye, talks like a knell, and his hum is a battery. He sits in his state, as a thing made for Alexander. What he bids be done is finish'd with his bidding. He wants nothing of a *god* but eternity and a heaven to throw in.

(5. 4. 19—26)

これは、Menenius が、Sicinius に、ローマ焼討中止の嘆願に行つた婦人連は、失敗するだろうと話す場面である。「まるで活神様だ。不死でないばかりだ。天に居処がないばかりだ。」という Menenius の言葉に、人間界にありながら、神と匹敵する存在の Coriolanus の姿が、鮮かに述べられている。更に、この後に続く両者の対話で、「神」に関する主題は終つている。

Sicinius, The *gods* be good unto us!

Menenius. No, in such a case the *gods* will not be good unto us. When we banish'd him we respected not them; and, he returning to break our necks, they respect not us.

(5. 4. 34—37)

Menenius は Sicinius に、慈悲心を願つても無駄である事、以前彼等が神を無視した為、今度は Coriolanus が、神のような存在となつて、彼等を罰しに来る事を述べている。

以上、私は、“god” のイメージを通して、Coriolanus の “solitariness” を見て来た。然し彼は、死ぬ迄完全に “solitariness” を通したのではない。母、妻、子供に絆されて、ローマ焼討を中止した彼に、一時的とは言え、人間性への復帰が見られた。だが、死ぬ直前再び “solitariness” に戻る。ヴォルサイの将軍、Aufidius に罵られ、憤然として叫ぶ彼の台詞（引用前出）の中に、ローマ人からも、ヴォルサイ人からも孤立無縁の彼の姿が、強く示されている。人間界において、所詮神でもない彼が、“solitariness” の存在にあつたところに、彼の悲劇がある。

以上のように、戯曲 *Coriolanus* において “disease” “animal” “god” のイメージは、夫々 Coriolanus の性格描写に重要な役割を果している。“disease” “animal” のイメージで、民衆の移り気や、卑劣さを強調する彼は、逆に同じイメージで、民衆から忌み嫌われ、最後に “god” のイメージで鮮かに描き出されているように、人間界と全く無縁の存在、つまり、“solitariness” の存在になる。

上述のイメージは或る幕にだけ頻出——例えば、“disease” “animal” のイメージは、共に1幕1場、3幕1場、“god” のイメージは、5幕3場、一して、他の幕では、散発的にしかあらわれないが、夫々大きな役割を果している。即ち集中してあらわれる幕は、何れも劇の

重大な場面であるし、又たとえ散発的であつても、絶えず我々に、劇の主題に関心を払わせる点から見て、その累積的効果が著しい事は否定出来ない。

## 注

- 1 G. B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies*, London, 1956, p.228
- 2 C. F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It tells Us*, Cambridge, 1958, Chart VII.
- 3 この箇所は Plutarch では次のように書かれている。  
 “The Romans at first were obliged to give ground, and were driven to their entrenchments. But Marcius with a small party flew to their assistance, killed the foremost of the enemy and stopping the rest in their career, with a loud voice called the Romans back;” (Langhorne Translation). Plutarch には、唯, “with a loud voice” とあるところを, Shakespeare は, “disease” のイメージで, 見事に劇の中におり込んでいる。
- 4 W. Rosen は “No less than thirty-five times is the term “honour” voiced in the play” と言っている。( *Shakespeare and the Craft of Tragedy*, Harvard, 1960, p.163)
- 5 R. A. Foakes, “Sugestions for a New Approach to Shakespeare's Imagery”, *Shakespeare Survey* 5, Cambridge, 1952, pp. 84—85  
 Foakes によれば, 2幕2場, Macbeth の Duncan 王殺害の場面に, 「眠り」(sleep), 「不眠」(sleeplessness) 「眠りに関係のある」 イメージが18も, 更に2幕全体にわたつて31も用いられているということだが, Duncan 王を殺害した Macbeth が, 神の恩寵である「眠り」をなくした事を強調するのにすぐれた役割を果している。
- 6 1幕1場は, Meninius と対照的に, Coriolanus の尊大さが強く打ち出されており, 3幕1場は, Coriolanus 追放の原因になる場面である。
- 7 たとえ散発的であれ, 全幕到る処にあらわれ, 我々に絶えず主題を思い出させる効果がある。
- 8 A. Yoder は *Animal Analogy in Shakespeare's Character Portrayal*, New York, 1947, p.65 で *Coriolanus* の中に105の動物のイメージを数えあげている。
- 9 Ingratitude is *monstrous*; and for the multitude to be ingrateful were to make a *monster* of the multitude, of the which we being members, should bring ourselves to be *monstrous* members.(2. 3. 10—14)
- 10 唯一人で, Corioli の城門内に突入する彼と(1. 4), 「みんな休息するがいい。立派な働きだつたいかにもローマ人らしい振舞だつた。無謀な抵抗もせず, 卑怯な退却もせず。」(1. 6. 1—3) と言つて退却した兵士達を誇る Cominius と比べるとよい。
- 11 I. Ribner, *Patterns in Shakespearian Tragedy*, Methuen, 1960, p.200
- 12 G. W. Knight, *The Imperial Theme*, Methuen, 1954, p.196 で, 女性の愛が, 彼の尊大さに打ち勝つたのだと述べている。

### Summary

#### A Study of the Function of Imagery in *Coriolanus*

—with special reference to the “disease”, animal” and “god” imagery—

Hitoshi Uchiyama

In *Coriolanus*, the disease, animal or god imagery plays an important part in the characterization of the hero.

From proud Coriolanus' point of view, the plebeians are fickle and worthless, and this is shown emphatically through the disease and animal imagery.

From the plebeian point of view, however, Coriolanus is haughty and must be isolated from Rome. His isolation or “solitariness” is vividly depicted by the use of the god imagery.

The disease, animal or god imagery appears concentratedly in some Acts, where its use brings forth a remarkable effect. Elsewhere, it is only scattered throughout the play, but the cumulative effect of the use of the imagery is very strong.